人間ドキュメント

あの日あの時

「ぴあ」軍団を率いる

矢内　廣さん

27年前、中大の駿河台キャンパスで、「サラリーマンにはなりたくない」と考えていた1人の学生がいた。その人が現在の、ぴあ㈱代表取締役社長の矢内廣さんである。矢内さんは大学在籍中に雑誌「ぴあ」を創刊。四半世紀で、いまのような「ぴあ㈱」を築き上げた。いわばベンチャー企業の先駆者的な役割を演じてきた方である。この企画では、いままで往年のスポーツ選手を取り上げてきたが今回、初めてビジネスのジャンルから矢内さんに、ご登場願った。「ぴあ」創刊時の苦労、21世紀の展望、若者のことなど、独特の〝矢内節〟に私たちはただ聞き入るばかりだった。

（学生記者・山本　明子、倉田　政美）

「ぴあ」本社応接室で

ベンチャー企業の先駆者

「リスクを恐れるな」

★まず学生生活のことから、お話いただけませんか。

――なにを目的として大学へ行くのか。自問自答のなかで出した結論は「世の中の仕組みを知る」ために、法律を学ぶことでした。しかし、入学してすぐに大学は70年安保の闘争でロックアウト、学校の中に入れないという状況でした。そういう時代ですから、講義は半分ぐらいしかなかったですね。

サークルは映画研究会で、アルバイトもいろいろなことをやりましたよ。「ぴあ」は、いろいろなアルバイト経験から生まれたようなものです。いまの学生はアルバイトで海外旅行に行くとか、スキーだとか、そんなお金の使い方になるでしょう。僕らの時は生活のためにアルバイトをしていたわけですから、状況的には当時と今では、ずいぶん違いますよね。

入学後、最初にしたことは奨学資金の試験を受けたことでした。毎月いただく奨学金やアルバイトで食べていました。日本が貧しかった、最後の時代だったかもしれませんね。

「ぴあ」創刊号の表紙

★すると、「ぴあ」を作ったのは。

――大学3年のときだったかな。TBSでアルバイトをやっていたんですよ。報道局のテレビニュース部C班に配属されていて、ニュース番組の補佐業務をやっていました。スタジオに入ってカメラの前でフリップを出したり、ニュース原稿を配って歩いたり、作業を皆で分担してやっていました。

当時、首相は佐藤栄作さん。ニュースの内容に合わせて資料室から首相の写真を選ぶのもアルバイトの仕事でした。「きょうは、これでいってみよう」と、写真を選ぶのはおもし

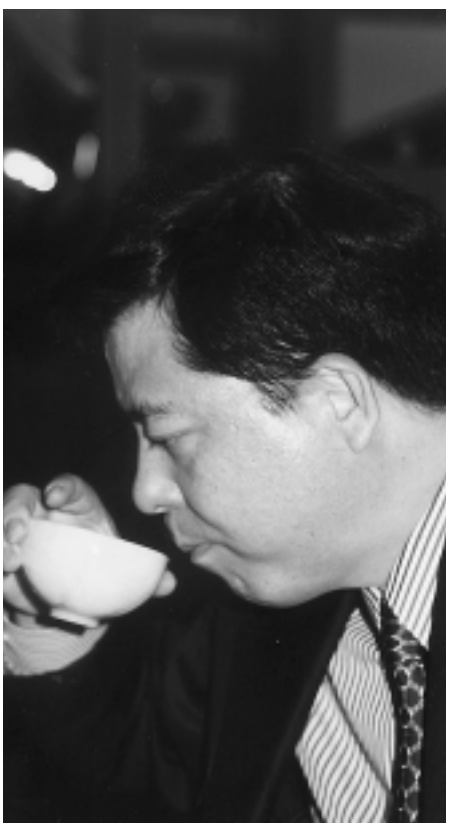
ろかったね。週に一遍、必ず泊まりがありました。そんな時、友だちと居酒屋に行って、なにやかやと話すのが楽しくてね。不思議なことに皆が「このまま大学を卒業して、サラリーマンになるなんてシャクだな」と思っていることがわかりました。それが「自分たちで自分たちの仕事を作ろう」という発想になっていったんです。

ロードショーは高くて観られなかった

★そのへんをもう少し詳しく……。

――最初はいろいろなアイデアが出てくるんですよ。カレー屋をやろうとか、古本屋がいいんじゃないかとか。将来的な展望のないものばかりでね。最初は面白半分、そのうち半分本気となり、いざ、現実的になると「これは簡単じゃないぞ」というふうになってくる。世の中は、われわれが入り込むスキもないところまで出来上がってしまっているのかもしれないと、悲観的になった時期もありました。でも、ある時「ちょっと待てよ」という気がしてね。われわれしか知らない世界が、この世の中にありそうだと思ったんです。それが「ぴあ」につながっていくんですよね。

僕は映画が好きだったから、映画研究会に入っていました。でも、ロードショーの映画は高くて観られないので、料金が安くなる二番館、三番館で観るのですが、じゃぁ、いつからどの映画館で安く観られるか、ということが関心事になってくる。当時、そういうことが掲載されていたのは、新聞の3行広告か、「キネマ旬報」の名画座情報欄ぐらいでしたね。でも、いずれも網羅された情報にはなっていなかった。観たい映画を見逃しちゃうことが、あったりしてね。不便を感じていました。



軒並み断られる

★いよいよ、ここで「情報誌」の登場ですね。

――当時、情報誌という言葉もなかったけれど、こういう情報を集めて一冊にできたら、どんなにいいか。「100円なら僕だったら買うな」というふうに思い始めた。その話を仲間にしたら「それはおもしろい」ということになりました。

TBSのアルバイト仲間には、偶然にも音楽や演劇活動をしているのが集まっていたんですよ。そのうち「掲載する中身が映画だけじゃ……。コンサートや芝居、画廊や美術館情

報も必要とされているのではないか」ということになりました。「芸能・文化的な情報を全部ひとまとめにしたインフォメーション・マガジン。これは商品化できるんじゃないか」ということが頭にあったんでしょうね。それが最初ですよ。

ただし、問題はありました。雑誌の編集・広告はクリアーできたが、流通の問題が残りました。通常の出版社は必ず、取次店という出版の問屋に扱ってもらいます。そこで取次店に行きましたら「話にならない」と、相手にされませんでした。学生が定期刊行の雑誌を出すなんていうことは、信用してもらえなかったんでしょうね。

そこで出来上がった、サンプルの「ぴあ」を持って、本屋さんを一軒一軒回ったら、これもことごとく断られちゃいましてね。「本を置くスペースがない。だいたい売れるわけもない」っていうんです。弱っちゃってね。印刷会社には雑誌の発注は済ませちゃったし、この分だと、1万冊の「ぴあ」が僕の下宿に届いて、頓死かと思いましたよ。

一通の紹介状が流れを変えた

★万策尽きた矢内さんとしては、どうされました。

――そんな時、紀伊国屋書店の社長だった故田辺茂一さんが日本読書新聞に「活字文化のためには、小売店のマージンをもっと引き上げなければならない」ということを書いておられた。これは本屋さんに「ぴあ」を持ち込む方法と同じ考えだなと短絡的に思い、田辺さんから直接、話をうかがうことになりました。

その時、田辺さんは銀座の教文館という本屋さんの社長を紹介してくださり、さっそくお会いしました。その社長は中村さんという方で、いきなり、「学生が雑誌をやるなんて無茶だ。プロの編集者でさえ、うまくいかないのが雑誌の世界。傷口を広げる前に早く止めた方がいい」と諭されましたが、最後は「置きたいと思っている本屋さんのリストを持って来なさい」ということになりました。

僕にとっては一生忘れることができない話です。リストをお渡しすると、中村さんは山のような封筒の束を用意して「これを持って、もう一

度、本屋を回り直しなさい」と。実は紹介状だったんです。封筒の表には「○○書店の○○社長殿」と書かれ、もう感激でしたね。

新たに回ってみると、各書店の社長さんは「しょうがないな」といいながら本を置いてくれた。これが日本的社会というんでしょうかね。置いてもらったお店は89軒にもなりました。僕が田辺さんと出会っていなければ、中村さんと出会っていなければ、いまの「ぴあ」はないんですよ。そういう意味では非常に幸運な門出でした。

主観をいっさい排除

★「ぴあ」が若者に与えた影響はどうでしたか。

――別に若者文化に影響を与えようと思っていたわけではありません。創刊当時は「もの言わぬ饒舌誌」と呼ばれました。例えば、この映画は良いのか悪いのかという論評は掲載してません。いっさいの主観を排除し「いつ、どこで、だれが、なにを」というように、客観性を追求したのです。そのために、こういう表現で言われたのでしょう。70年代を象徴しているように僕は感じますね。

現在は、学生による自主制作映画などが、新聞やテレビで多く取り上げられていますが、70年代は「アンダーグラウンド」と呼ばれて、世間からは別物、風変わりなものという扱いを受けていました。当時の「ぴあ」は、ロードショーから学生が制作した映画まで、公平に情報を掲載していました。

自然体で会話している内容をそのままに

★ところで「キャンドゥ！ぴあ」は、読者のネットワークを組織して、徹底的に読者参加のシステムを作っていますが。

――「キャンドゥ！ぴあ」は、口コミや若者が自然体で会話をしている内容を、そのまま掲載していこうという方針です。その結果、内容にリアリティーがあるということから、だんだん支持率が上がってきています。もう一方で、現在はインターネットに代表されるような、デジタルメディアによる情報が世界からリアルタイムで入ってきます。当然、アナログとデジタルの両者が捉える街の姿には違いがあります。その両者からの情報が重なり合うことによって、すべての人たちの街や都市観が変わってくるのではないでしょうか。

原点は「東京は記号の街」

★矢内さんにとって「街」の概念は。

――ひと言でいえば、僕にとっての「街」は「記号」ですね。僕の出身は福島県のいわき市ですが、中大に合格して東京に出てきた時、人と車の多さに驚いた。それと新宿駅は何本もの路線が入っているから、ターミナル内で乗り換えようとしたら、道に迷ってしまった。その点、僕の田舎は海が近かったから、風の流れや匂いで動物的に方向がわかってしまうんだね。

ところが東京は人工的な建造物ばかりで、景色から方角がわかるなんてことはなかった。そうなると、記号だけが頼りになってしまう。つまり、ターミナルにいくつも路線が入っていても、緑の丸印表示は千代田線で、赤の丸印は丸の内線という具体に、いま自分がどの方向に向かっているのか、わからなくても、記号通りに歩けば、ちゃんと連れていってくれるんだね。その時、「あっ、東京は記号の街なんだ」と思った。それが「ぴあ」をつくる原点になったのかもしれませんね。

自分の将来のことを計算しすぎる

★現代の若者について、ひと言。

――自分自身の将来のことを計算しすぎている若者が多いのではないでしょうか。いまの学生でも「このまま、サラリーマンになりたくない。事業を起こしたい」と思っている人は多いと思いますが、しかし、実行に移す学生は少ないでしょう。つまり、「大企業のサラリーマンになれば生涯賃金がいくらぐらいになるか。それと比べると、ベンチャービジネスは苦労ばかり多くて……」というふうに、計算を先にしてしまうんです。

最近は地方自治体やさまざまな経済団体が、ベンチャービジネスを興そうとする人に対して援助をしていこうという動きがあります。また、大学のカリキュラムにベンチャービジネスの基礎を考える講義も登場しています。昔に比べれば、いまはベンチャービジネスを興しやすい社会環境になっているのです。にもかかわらず行動する人が少ない。非常に残念なことです。

学生の多くがベンチャービジネスのような冒険ではなく、安定を選択してしまうと、日本経済は沈んでしまう。日本という船は、安全で何もしなくても動くし、まして沈むことはないという幻想を抱いている人が多い。現在を直視すれば、いま日本という船は、どんどん沈んでいる状態です。

名前と内容、関係ない

「ぴあ」という名称の由来は。

――ユートピアの「ぴあ」を取ったのですか、と人からいわれますが、本当は何の意味もない言葉です。僕は意味のあるタイトルは付けたくなかった。確かに当時は、雑誌のネーミングの常識からいえば、タイトルを見れば内容がわかるというのが筋です。素直に「月間プレイガイド情報」と付けるのが適当でしょう。でも、それではつまらない。

つまり、将来にわたってまで雑誌を作る自分たちが、タイトルから内容の制約を受けてしまうからです。それにタイトルは一人歩きしていくものなんです。例えば、「朝日、毎日、読売」っていう名前は、考えてみればヘンなタイトルですね。つまり、その意味は内容と関係ないんです。「ぴあ」も、まったく意味がないタイトルだけど、多くの人に受け入れられることによって、気づかないうちに特別な意味を持ってくれることを願いました。

若者発想の映画づくりを支援

★映画について、そして「ぴあ」の今後のついて。

――「ぴあフィルムフェスティバル」は、ことしで21回目を迎え、応募数は900本を超えました。そのほとんどが学生の自主制作映画です。現在、審査を行っていますが、優秀作品の監督には次回作への制作資金を提供します。僕は、若者たちの発想と感覚で作った作品を上映するな

どの援助をして、彼らのための橋渡しをしていきたい。

創造性は、日本人だって相当な実力を持っているはずですよ。それを「かたち」にして、さまざまな立場の人が支持しあって、世界に送り出してあげられるような世界をつくりたいですね。

社会活性化の主役

★最後に中大生へのメッセージを。

――アメリカは毎年の企業開業率が、閉業率よりも高いのです。日本はその逆です。つまり、アメリカは新しいものを取り入れようとしている社会なんですが、日本は全体を維持しようと安定を求めてしまうんでしょう。だからこそ、さっきもいったようにリスクを恐れずに、いろんなことに挑戦してほしい。

もちろん、ぴあ㈱にも、そのような学生が一人でも多く入社してくれることを願っていますが、ぴあ㈱に限らず、社会全体を活性化してほしい。新しい世界は若者によってつくられるべきです。

（おわり）

矢内　廣（やない・ひろし）氏

1950年1月、福島県いわき市生まれ。県立磐城高卒後、69年中央大学法学部入学。在学中の72年、TBSでのアルバイト仲間で月刊雑誌『ぴあ』を創刊。73年同大学卒業。その翌74年12月、ぴあ㈱を設立、代表取締役に就任。

㈳ニュービジネス協議会副会長、㈳経済同友会幹事、㈳日本雑誌協会理事なども務めている。

《初心を忘れぬ心》

応接室に飾られた大きな写真＝**左上**＝を背に、矢内さんは学生記者の質問に答えてくださった。

写真には、中央に「教文館」の中村社長が座り、その周りを矢内さんをはじめとする「ぴあ」の幹部役員が囲んでいる。撮影者は、篠山紀信氏だという。創刊時の出会いをいつまでも忘れない、という矢内さんの心を強烈に感じた。（山本）

インタビューを終えて

《今からでも遅くはない》

矢内さんの「新しい社会は若者によって創られるべきだ」の発言から、「ぴあ」創刊に若さのエネルギーをぶつけた、かつての姿が見えた。失敗を恐れず物事に挑戦する人を目の当たりにした感じだった。

その点、私は将来に対する漠然とした焦燥感ばかりだ。今からでも遅くはない。好奇心を持って、大いに社会を見つめていきたい。（倉田）